

方言学推進を旨とする私の研究展開

藤 原 与 一

本稿は、昭和六十年四月三日の一会合で口頭発表したものに、手を加えたものであります。

研究展開とは、研究が展開するという意味で、また、研究を展開させるという意味で、つかって見たことばであります。私にとって、方言研究は、いま、自己のうちに、しぜんに展開しているものであります。が、また、私は、これを展開させようとしています。

第一章 昭和日本語の記録

一 私が日本語について知るところ

私は、日本語（↓現代語）について、知ることがごくすくないあります。たとえば、受けひきのことば（応答の文句）（あいづちことば）一つを考えてみましても、現代日本語について、私を知るところは、ごくすくないので

あります。たとえば、薩隅方言下の大隅内の浦方言について、その事実をとりあげることができていますが、考えてみますと、これも、いわゆる薩隅方言の事例のいくらかにとどまるものようです。ましてや、全国諸方言について、せめても、ただいま内の浦方言について申しのべうる程度のことを申しのべようとしても、それはもう、明らかに不可能なことなのであります。

まず、内の浦方言の調査結果をお聞きとりたいだきましよう。まず、

○シター。

ふうん。

○ヂャーヂャー。

そうか！そうか！

○チャ ガ チャ ガ。

そうそう。

があります。

○ソイ ソイ。

そうだそうだ。

というのがあります。つぎに、

○チャ ネー。

だねえ。

があります。つぎには、

○チャライ。

そうです。

があります。「チャライ ナー」。(そうですねあ。)などの

言いかたもなされています。「チャライ」は、「チャル

ワイ」からのものでありましようか。さてつぎには、

○チャヒ トー。

そうです。

があります。

○チャンヒ トー。

そうですよ。

もあります。つぎに、

○チャツチヨー。

そうだよ。

というのがあったかと思われませんが、これは不詳のものであります。つぎに、

○チャ ドー。

○チャツ ドー。

そのとおりだね。(そのとおりですね。)(そうだ

そうだ。)

があります。また、

○チャンドー。

そうだそうだ。

もあります。つぎには、

○ゴアンド ナー。

ええ、そうですねえ。

が見られます。これには、助動詞、「だろう」の「ド」が

見られますが、土地人の説明は、「これは、「ええ、そうで

すなあ。」と、すぐに受けひくことば。」とありました。

○ゴアンド ガー。

は、「そうでしようが?」と、相手に聞くもの。とのこ

とであります。さてまた、

○ゴザンシタ。

でした?

というのがあります。「どうどうで ゴザンシタ？」と問うことは、はなはだしい略形になっています。これも、問いかたによる受けひきになっています。薩隅方言下に、文表現の大部の省略される習慣があり、「今日は。」とのあいさつことばも、「チャシター。」などと言われています。これは、「コンチャ アダツ ゴアンシタ。」（今日はまだでござんした。）からのものでありましょう。このような省略習慣のもとで、いわゆる応答のことば（受けひきことば）も、上掲のようなものが見られることになっているのでありましょう。

薩隅方言下、内の浦方言での、以上ひとまとまりの状況に関連するものは、九州方言下に、どう見られるのでありましょうか。「ジャヒ トー。」[↑]「ジャイ トー。」[↑]（そうかね。）（そうですか。）などは、肥後に、わりとよく見いだされるものでありましょう。「ジャージャー。」（そうどうだ。）（そうですそうです。）は、九州東北部の大分県下に、ひとりよく見られるものようであります。総体には、薩隅方言下を除くと、九州方言内に、受けひきのことばの、さほどまでの多彩さは見られないかもしれません。が、これは一つの推測に過ぎず、ことがらは、私にとって、まったく未詳であります。

「ジャージャー。」一つなら、国の諸地方内の状況に関して、たとえば南紀にこれが見られるなど、多少の立言が、私にもできますけれども、受けひきことば一般となりますれば、これの全国状況を語ることは、今の私には不可能であります。ことほどさように、私は、日本語について、知ることがすくないしであります。

東北地方の受けひきことばには、「ンダ。」（そうだ。そうです。）があり、これは広く知られていましょう。その周辺には、同趣のどんなものがありましょうか。「ンダ ス。」（そうです。）などは措くとして、他にどんな特殊慣用文が見られるのでしょうか。私には、調査不十分であります。余談ながら、さきの内の浦方言にもどりますと、「ンダンダ。」[↑]というのがあって、これは、「まあまあ！」とびっくりした気もちをあらわすことばであります。「エー、ンダー。」[↑]（まあ！）との応答文句もあります。所かわれば、ものが、こうちがつて、分布調査もゆだんができません。（ちなみに、内の浦地方では、むかしは「ンダー。」[↑]と言っていた。今は「ンデー。」だ。"とも言われていました。"）せまい範囲のこと、受けひきことば一つを問題にしても、日本語のありさまを知することは、じつに、容易ならぬことであります。日本語を研究しようとするからには、私は、

おおいにしごとをしなくてはなりません。

二 今日の「日本語の地方状態」に関して

このさい、現代日本語の地方状態について、一言してみよう。日本中には、調べれば見つかることが、まだまだ多いと思われます。いえ、すぐに見つかるもの・ことがどんなに多いことでありましょうか。日本語はどんどん変貌していつているとも考えられますが、他方、変貌のゆるい局面も多く、また、不動とも見られる底面もあります。変わって変わらないのが言語であるとも言えましょうか。

ここでだいじなのは、言語推移に関する基本的な考えかたと、動いてもいく言語を調査する態度の純粹さとであります。態度上では、ひとまず私なりに、自然傍受の徹底におもむく時、私は、そこでたちどころに、日本語の不動の深部にもふれていくことができますのであります。

去年は、愛媛県下の八幡浜市で、一つの経験をしました。私は、したいしい先輩の宅で、土地っ子二人の男性の、ざっくばらんな気もちでの会話を聞くことができました。そこでただちに思ったことは、ここに出ている話しぶりが、大正末年、松山の師範学校の寄宿舎で私の聞いた、南予出身の同僚たちの話しぶりにそっくりということでした。変わ

らないありますが、このようであります。私どもの前には、どこにも、たのしい調査探求の世界が開けているのではないのでしょうか。

研究は進歩しても、どの道にもあれ、なお、まだまだ調べなくてはならないと考えられることが多いありさまでしよう。私は、多いのが道理だと考えてみます。最近では、鈴木博氏の『室町時代語論考』に接しました。また、朝倉尚氏の『禪林の文学——中国文学受容の様相』に接しました。諸兄が求めて調べに調べていくさまが、ここに明らかであります。これらに励まされつつ、私もまた、いろいろと、調べていかななくてはならないことを考えるものであります。現在、まずまずのところでは発表をしたものが、たとえば、方言敬語法の研究であります。また、文末詞・文末助詞の研究、民間造語法の研究であります。これらでは、日本語の地方状態の把握を目ざして、いくらか、こまかな努力もつみかさねました。

自分が求めたく思いますのは、理想的な実態記録であります。日本語の地方状態の広大であることを思えば、理想への道が、多岐亡羊たるものであることが思われてなりません。けれども、そのようであるからこそ、私は、調査のしがいい覚え、記述のしがいい覚えるのであります。

三 日本方言辞書

理想的実態記録の悲願の存するところ、一つには、日本方言辞書の編述がごさいます。

これと、『昭和日本語の方言』『昭和日本語方言の総合的研究』とは、私の求める三つの祈念塔であります。

ここでは、『日本方言辞書』の実践について、いくらかはふれてみたと思いますが、今はそのゆとりがありません。

心するところだけを一言しますならば、私はやはり、人間言語学として、生活語学として、この業をなしとげていきたいと考えるものであります。『専門家の手品』にはないしごとをして、公正に、日本語の記録を成就したいものであります。

第二章 歴史的研究

一 史実記録

「昭和日本語の記録」というのは、私にとって、一種の歴史的研究であります。後世からは、私どもの昭和現在の記録が、みな、一個の史実記録と見られましょう。

後世の人は、私どもの、昭和日本語の地方状態の記録を、日本語の歴史の一コマとして、どうとらえましょうか。

とらえられるのに十分な記録、とらえられて然るべき適正な記録を、私どもは用意しなくてはなりません。

それゆえ、私は、別して、文表現本位の記録を重んじます。

私の、昭和日本語方言の研究の記録しごとは、こうした歴史的研究であります。

二 口頭語国語史の記述

私は、従来、方言研究にたずさわって、国語史研究への参与を意識してきました。

こういう私に、国語史研究上、一つの展開があります。それは、真の口頭語国語史を編むことであります。かえりみますと、私は、学生の当初、国語史ということばを受けとめ、これに、まったく純粹の口頭語本位の国語史を想像しました。文献語による国語史記述というものになれるまでには、『まぎれなしの「国語史」』というものがあるのではないか。との思いが、いつもあたたまをよぎりました。

近時、小林教授によって、角筆文献の調査による国語史研究が、敏活に推進されつつあります。それからの恩恵に

よって、私は、口頭語国語史記述なるものを、おおいに考えさせられています。従来、いわゆる訓点語による国語史研究は、物語用語その他による国語史研究に、あらたな掘削を見せることが多かったと思われます。その訓点語研究に対して、今や、角筆文献での訓点語研究、訓読語研究、小林教授の独自のおしごとが、さらに、事象の前期的な、より早い時期の存在を立証しつつあります。このおしごとこそは、過去の口頭語の史実を、至近距離でとらえるものとなっているのではないでしょうか。私は、角筆文献による国語史研究に、口頭語史解明を囑しています。

小林教授が、五十九年十一月、高松での国語学会中国四国支部会で発表せられた「国語史料としての角筆文献」によれば、つぎのようなことがうかがわれます。『石山寺藏漢書高帝紀下』の平安中期角筆点には、「ウバフ」にあたる「バフ」があります。また、「イダス」にあたる「ダス」があります。「バウ」や「ダス」こそは、まったく、現代諸方言界での通用語ではないでしょうか。私どもは、角筆文献のご研究に参入することによって、逆視的に、上つ世にわたる口頭語史の再建をものすることができます。「方言と国語史」の問題は、小林教授の角筆文献研究に親炙することにより、その新鮮な解決をはかることができます。

「国語史と方言」とも言われる、両者の密接関係が、角筆文献によって、いよいよとらえやすくなりましょう。

三 高次共時論

このさい述べそえてみたいのは、私の高次共時論についてであります。ご判断くださいますとおりに、これは、私の「歴史学」であります。

高次共時論の方法を流通させることによって、私どもは、しだいに、全体的な口頭語史を叙述していくことができます。しよう。

現在の、私どもの全方言事態が、つねに、過去を大きく示し、未来をまろやかに想像させることの、壮大とも言うべきその発展性を、私どもは、いくえにも重視したいものであります。

第三章 方言学への基礎的努力

方言研究推進、その体系的推進のために、私は、以下に述べる基礎的な努力を重んじています。——その努力の展開に、日夜つとめているしだいです。

一 私の音声学

この節、私は、「私の音声学を」といったような気もちをつよくしています。非才のため、私は、すくなくらめ音声学書と音声学者と共に追隨してきましたが、今にいたって考えさせられています。微視分析の面にしても、人々の耳、かならずしもつねには正確ではないのではないかと。人が、その精密表記にしたがって発音するところにも、まま私の首をかしげさせるものがあります。分析論での議論の進めかたにも、私の理解しがたいものがすくなくあります。

私は、日本語の歴史的現実（諸方言社会をおおうところの）を注視することに努めて、日本語の事実の忠実に、私の音声学を建設してみたいと考えます。

閉音節化の問題は、過大視しないように用心しています。薩摩大隅地方の発音が、「くつ」も「クツ」「書く」も「カッ」であるのとらわれて、一挙に、薩隅方言を特別視すること、私はしないのであります。それらの発音の背後に、あざやかな閉音節発音のいかに多大で規則的であることでしょうか。また、閉音節の発音とされるものも、たとえば「書く」の「カッ」も、もともととは、「カク」であっ

たろうと考えられます。当地方では「ク」の母音が無声化し、やがてそれが脱落に近い状況となつて、「カッ」の発音ができたのではないのでしょうか。上村孝二氏は、やはりこのことを述べられるとともに、母音無声化の状況での発音も、おこなわれる地方のあることをとりたてていられます。

音声研究での総合的な把握の方面を、ことに重視しようとするのは、多く言うまでもないことであります。

二 私の文法考察

てにをはに関して、すこしのことを述べてみます。「だれかおろう。」などの「か」は、副助詞とされています。私は、係助詞と解してよいのではないかと考えるものです。副助詞と解する人は、「係り結びの法則が消滅したから。」と考えるようであります。ところで、「しか」は、係助詞と考えられています。（いわゆる係り結びはありませんけれども。）その「しか」と「だれか」の「か」とは、類同のものではないでしょうか。「こそ」に関しては、人々が、これをただちに係助詞としています。（通常、係り結びは見られません。）「こそ」のとりあつかいにちなんで、「か」のとりあつかいを考えるべきではないでしょうか。

つぎに、「君か今村かにたのまねばならぬ。」というよう
なばあいの「かに」の「か」を、準体助詞とする説があり
ます。私はこれに賛成であります。そうして、私は、広く
場面的に、準体助詞をとりあげます。文表言上、助詞が重
用されれば、——たとえば「そればかりが心配です。」と
ある時、私は、「ばかりが」の「ばかり」を、この文表現
にはたらく準体助詞と見ます。助詞重用のさい、後助詞に
対する前助詞は、つねに体言化の地位にあると考えるのが
私のたちばであります。

三 語彙の研究

一つの言語、またその大小の方言、それは、統一体であ
ります。統一体である一軒の家の、今しも棟を上げた姿は、
文法構造であります。その家屋のすべての部品の一括が語
彙であります。

辞書製作が語彙の研究であることは、再言するまでもあ
りません。造語法研究の所業は、まさに、社会言語学的な
ものであるうと考えられます。

四 正書法 文体論（方言学での記述のタメに）

この発表の急務であることを、今日、痛感しています。

「言う」と「いう」とは、区別してつかうのにふさわし
いものでありましょう。「それを言うのは早すぎる。」など
のばあいは、「言う」と表記するのが適切であります。「そ
ういうことは」などでの「いう」では、漢字を用いないのが
適切であります。「そのご」と言うばあいは、「その後」と
は書かないのが是とされます。「その後」と書けば、これ
を、「そのご」と読む人もあれば「そののち」と読む人も
あります。筆する者は、つねに誤読を恐れるべきです。

「文体」の語が、「文章」や「表現」の語と、さしての
区別なくつかわれているのは、採りがたいものであります。
語の次元にあつてもものを考えるさいに、みだりに「文体
的特色」あるいは「文体になに」を言うのは、文体論存
立の次元を見あやまったものではないでしょうか。

五 文芸へ

私は、言語感覚修練のために、いささかなりとも、文芸
の表現読みに努力していきたいと考えるものであります。

結章 研究展開の学心

一 学は本来発展的

学は、本来、発展的なもの、非限定的なものでありましょう。学は、つねに進んでいるはずのものでありましょう。私にとっては、学に、新も旧もありません。（固定的に考えることは、私の、もっともよく自戒するところであります。）

方言というものにしても、これを固定的に考えることは、危険であります。私は、日本語というものも、固定的に考えてはならないとしています。

言語は、海水のようなものではないでしょうか。地球上に諸言語があります。が、それらはいずれも海水の部分であり、海水そのものは、地球上に一元的であります。

ここで、

「方言も、世界的な広さを持つものである。」

とも言ってみたいのであります。方言が、一個の小方言をとって見たばあいにも、その内部に、深い、あるいは広大な微妙世界を見せているのですから驚かされます。私の郷里語から一・二の例をとり出してみしましょう。知恵のたり

ない者を言うことばに「サンモン」ということばがあり、「ハチモン」ということばがあります。「三文」というのは、ひじょうにたりない人のことを言うものです。「八文」というのは、すこしたりない人のことを言うものです。

「三」と「八」とをつかつて、なんと巧妙に、ものごとを言いわけたものでありましょう。ささいな事例のようでありますが、私は、このことにも、人間精神の深美のはたつきがやどっていると考えるのであります。——そのはたらしきの世界性がまた明らかであります。つぎの例は、

「イレソメル」と「ツギソメル」とであります。郷里方言では、「入れる」というほども入れない、ほんのちよつと入れることへ茶碗の二はいめVが、「イレソメル」と言われています。「ツギソメル」は、ふた杓子めを、ほんのちよつとつぐことを言います。「ソメル」の上に、「イレ」をおくか「ツギ」をおくかで、ことばは、以上のようにちがってきます。俗用のかんたんな「入れる」「つぐ」をつかつて、このようにもきれいに、かなり複雑なことを言いわけているのは、言語生活者たちの、造語のうでまえとも言えるものを、よく見せているものでありましょう。思えば、「そめる」という、雅語とも言ってよいものが、しみりと活用されています。しかも、雅・俗にわたり、人々

の、言語生活の一般的な精神作用の堂々とはたらいているさまが、ここにかがわれます。複合の方法・外延性もまた明らかであります。

今日、「純粹方言」などという声があり、したがってまた、非純粹方言を考えるむきやばあいがなくはありませんが、私どもは、今日、ただいまも、国のいたるところに、——心をこめてのぞめば、純粹方言を見いだすことができます。その純粹方言の中に、方言生活のすぐれて微妙なはたらきが、多く認められます。精神の広さ・豊かさをもった、そういう方言世界が、私どもに、学のつねに発展的であるべきことを示唆しています。

二 研究拡充の努力

本来、発展的である学のもとにあつて、私どもは、研究拡充の努力にしがいます。

つぎには、近來の私の、研究拡充の努力のいくらかを開陳してみます。

a 環境言語学を

生物地理学、ないし文化地理学の理念にささえられて、私は私なりに、環境地理学を夢みました。この環境地理学

の夢にしたがつて、私は、環境言語地理学を考え、今また、環境言語学を考えています。その総論たるべきものは、「日本環境言語論」であります。

とりあえず特論したいのは、「言語環境としての瀬戸内海」であります。瀬戸内海域は、私にとって、まさに注目すべき言語環境であります。一例、伊予の方言状態を見ましても、ひとり南予地方に、動詞二段活用が残存が見うけられます。（南予や土佐のことばには、九州のことばに似かようなものがある、との観察もなされます。）南予は、なぜ、このような状況を残しとどめるのでしょうか。氣づいてみると、南予は、じつに、瀬戸内海域を南にくぐる佐多岬の南にあるものです。南予は、内海言語環境の新化に遅れたのでした。そういえば、東のかた、瀬戸内海の南限をはずれた紀伊水道の東側にも、二段活用方式の残存が認められます。九州をほかにして、四国の西南部と近畿の西南部とに、離れて対応する二段活用残存の見られるのは、じつに、瀬戸内海言語環境の所在と活動とのしからしめたものでありましょう。

環境言語学は、今日しきりに提言されている環境学の思潮とともにらみ合わせて、多角的に育てていきたいと思ひます。

b 美を求めて

何の研究も、美に関係しないものではありません。わが方言研究もまた、深く美にかかわると私は考えて、今、しきりに、この道での美を求めているのであります。

方言という言葉が、おのずからにして言語美のものであることは、言うまでもありますまい。私は、近來、ことあらためて、一々の語詞をも、芸術作品として見ようとしています。

もし、方言研究の途上に、みだらな作意や、ことさらに誇張、あるいはかたんすぎる断定があったとすれば、それは、善意のことであるよりもむしろ悪意のことでありましょう。悪意は不美であります。善意の研究をまっしぐらにねらうのは、これすなわち方言の学の美を求めるものでありましょう。

c 宗教的心情の陶冶

私は方言研究↓方言学のために、宗教的心情の陶冶を重んじます。学問は学問宗教ではないのかとは、私の所感であります。学問の絶対的純粋性を希求することは、つねに肝心でありましょう。

言うところの自然傍受法は、あらゆる意味での自然を尊

重するものであります。自然とは何でありましょうか。私は、それは宗教の真髄をなすものではないか、とも考えてみるのであります。

d 社会的見地と心理学的見地とを

これについては、今、述べることを省略します。

e 哲学スル（思索につとめる）

研究拡充の努力の根源的な路線がここにあります。

仕事をとぎすましていき、有効なものにしていき、目的明らかなものにしていくためには、つねに理論化の思惟がいります。これが、私にとっては、乏しくても、「哲学スル」であります。

これは、研究を思想化していくことだとも言えましょうか。

カントは、その哲学を、ついには人間学にむすんでいます。哲学には四つの問いがある。……結局は然し、これらのすべてを人間学に属させることができる。

九鬼周造氏『西洋近世哲学史稿 下』p 一五二

一五三

人間の学としての方言学ないし言語学を、私も、忠実に

考え求めていきます。

その方言学を（言語学もですが）、私は、「生活語」学とよびます。

人間重視は生活重視の中に定位されなくてはなりません。「人間の学として」ということは、「人間生活の学」として、「生活者の学として」ということになります。

この学は、方言研究上、生活語学になります。

言語学が環境言語学とされれば、これもすなわち生活語学であります。

生活語の思惟は、ハイデッガーにも見ることが出来ます。その、哲学詩と言われる小品、『ヘーベル—家の友』には、つぎの文章があります。

国言葉こそ、如何なる言葉の場合においても、すべての生え抜きの言葉の靈妙な源泉であります。言葉の靈がそれ自身の内に秘匿してあるすべてのもの、それはこの泉から私たちの方へと流れ寄せて来るのであります。

（理想者 高坂正顕氏 辻村公一氏 共訳 『野の道 ヘーベル—家の友』）

このように、深い意味の語られる国言葉を、私は、人間の生活語と理解します。

生活語を考える勉強は、おのずから、深められる方向に

あると言えましょう。

三 学心日常

○ 修業

日々が、学を求める修業だと、私は考えています。広汎な修業であります。

○ 文章をみがく

その広汎・多角の修業が、今日の私には、ひっきりょう、「文章をみがく」ことになってしまっています。すべての研究作業が、「文章をみがく」の一元に帰着します。

このせつ、カント研究の若い友人、村田貴信氏の語られたことばに、

“カントを読むと、数ページに一語は、辞書にないことばが出てくる。”

というのがあります。カントは、その学の練成にしたいがおのずからにして、このように、独自の語をうち出したのでしょうか。カントにあつては、「文章をみがく」が、そのように、ことばを創造することでの「文章をみがく」でもあったのでしょうか。僭越ながら、私も、これまで一論文を成すごとに、そこに、すくなくとも一語・一語句は、自分がそれまでにつかったことのなかったものが出てくる

ようにと心がけました。

それはそれ、今日のなやみは、要するに、自分の学業の結晶としての文章が「わるい」ということであります。文章が書けません。“これだけしか書けなくて何が学問か。”といった嘆きが深いのであります。

毎日、文章と組みうちして、このせつ重用視しますのは、用語の語源であります。学友長西良輔氏に、ラテン語に溯つての語源解を教えてもらいます。これによって、私にも、「語」の善用が可能となります。よいかげんに書いては行けない気もちがつよまってきます。

○ 学の永遠

私は、文章をみがくことをもって、学の永遠にそなえる道ともしたいと考えるものであります。

(六二・一〇・二九)

(広島大学名誉教授)